



## 木下庸子 | 分居 [2002年/2008年]

Yoko Kinoshita

中村好文 = イラスト

Yoshifumi Nakamura



眼下に太平洋を一望できるバルコニーで、海を背に木下庸子さんとツーショット。バルコニーは部屋の床とほぼ同じ高さのウッドデッキで仕上げられているので、広々と感じられる

私は生まれつき風来坊的なところがあり、気に入った場所があるとそこに住んでみたくなる性分です。じつを言うと、私には東京の自宅の他に、浅間山のふもとに小屋があり、大磯にマンションがあり、千葉県千葉の田舎には友人と共同で所有している小住宅があって、私たち夫婦は、その4か所を、思い思いにあちへ行ったり、こっちへ来たり、そっちに泊まったりして暮らしています。

住宅設計をライフワークにしている私が、こういうダラシ草率的な暮らしをしているのは「いかがなものか？」と、眉をひそめる方もいそうなので、これまで私はこの話題をやんわり避けてきました。ところが、長年同じ大学で一緒に設計を教えている建築家の友人、木下庸子さんが、ある雑誌の鼎談で「分居」という概念について話しており、それが私のような風来坊的な住まい方を擁護して(というより、推奨してといった方が適切かもしれません)くれている内容だったので、今回は、その記事をご紹介しますところから始めたいと思います。

木下 | 以前、軽井沢で住宅を設計した時に「分居」という概念について考えたことがあります。クライアントは複数の住宅を所有しており、家族はそれぞれの住宅に分かれて住みながらひとりひとりが自由な暮らしを大切にしていました。私たちが設計した住宅も家族の中のひとりだけが住むためのもので、設計当時は「こういう住まい方もあるんだ」と思っていたのですが、これからはこんな住まい方が増えてくる可能性もあると思います。日本では1世帯1住戸はだいたい前に満たされ、現在は数字で見ると住宅は供給過多ですから、ひとつの家族が複数の住宅を持って、それらに分かれて住むことが増えてきてもおかしくないはずです。

このときの鼎談相手のひとは北山恒さんでしたが、北山さんもマルチハビテーションという言葉を使って「選択肢の多いことが人生の幸せに繋がる」と発言しています。話が前後しましたが、この鼎談のタイトルは「新たな住まい方が見えてきた」(『新建築』2010.10)というものでした。なんのことはない、私と妻は自分たちで気づかないまま「分居」しており、「新たな住まい方」を実践していたことになるのです！ところで、この発言をしている木下さん自身もじつは「分居」派です

た。それも、ひとつだけでなく、なんと「熱海」と「乃木坂」というふたつの性格の違う場所に「分居」を持っていたのです。

木下さんは、生まれてからアメリカの大学院(ハーバード)を卒業して日本に帰国するまでの24年間に20回も引っ越したという強者です。その中にはアメリカのニューヨーク、スタンフォード、ケンブリッジ、ボルティモアの他にイタリアのフィレンツェまで含まれています！そうした生い立ちのせいで、住まいそのものに対していくらか寄宿舎や学生寮のもつ「仮の住まい的」な身軽さを求める気持ちが培われたのではないかと、私は勝手に想像します。もしそうなら風来坊の私と「身軽」という共通点があることになるのです。

身近に同志を得た気分の私は、さっそく木下さんに、そのふたつの「分居」の見学を申し込みました。

爽やかな秋晴れのある日、「分居」の見学と撮影取材は、まず熱海から始めました。

目の前に相模湾を望むリゾートマンションの一室と聞いていたので、やはり昼の光で太平洋を眺めたかったからです。熱海駅から徒歩数分の大型マンションは築後35年を経っていますが、木下さんは「管



理が良くて、施設も充実しているところが気に入っている」とのこと。たとえば、このマンションには屋内と屋外にプールがあり、温泉の大浴場があり、ランドリーがあり、レストランがあり、ゲストルームがあり、図書室があります。そしてそれだけでなく、なんと、カラオケルームまであるのです。まさに至れり尽くせり。こうしたアメニティの充実も400戸を越える大型のリゾートマンションだからこそ可能だったのかもしれない。さらに、バブル以前に建てられたせいか、なによりもマンション全体の雰囲気がゆったりと鷹揚に構えているのが良い感じでした。こうしたことも、住人と訪問者をリラックスしたリゾート気分させてくれるのにちがひありません。

木下さんの部屋は8階にあります。鉄扉という言葉がびつたりの時

代もののスチールドアを開けると、目の前にはうなぎの寝床のような縦長の部屋が真っ直ぐ海に向かって伸びていました。正面突きあたりの海の見えるはずの開口部は障子で閉ざされていましたが、障子で拡散された自然光が乾いた霧のように室内にまんべんなく漂っていました。この部屋に一歩足を踏み入れたとたんに、私の脳裡に閃いたのは「韓式」や「韓流」という言葉でした。落ち着いて考えれば、障子のデザインと、組子の手前側に紙を貼るやり方が韓国式だったことや、その手前に置かれているのが、李朝風の棚(小机?)だったから、ということになるのですが、それ以前に、私は室内に充滿する空気そのものから直感的に韓国の伝統的民家などに宿っている独特の気配を感じ取ったのです。正面左手には寝室コーナーを仕



障子を開け放つと、海と空の風景が切り取られて目に飛び込んでくる。誰もが「あ！」と歓声を上げたくなる劇的瞬間。この部屋は、障子を開けることが一種のドラマであり、とっておきのご馳走である



障子は横棧を吹き寄せにした韓流のデザイン。逆光なのでわかりにくいですが、障子紙を組子の手前に貼って、これも韓流である。縦の棧割がバルコニーの手すりと同じに見えるが、これは、たぶん偶然の産物



寝台車の二人部屋の内部...ではありません。れっきとした寝室です。天井が抜けているので寝台車ほど閉塞感はないそうです



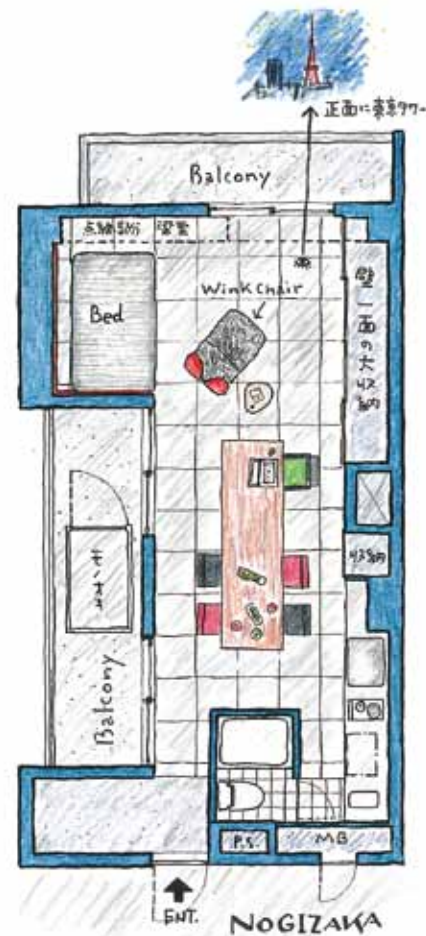
天井はコンクリートスラブをあらわしにして、白く塗装してある。ペニヤ型枠のランダムな継ぎ目が、韓紙の重ね目のほつれのように、素晴らしい

[建築概要] 名称:分居-A | 所在地:静岡県熱海市 | 専有面積:42.32m<sup>2</sup> | 規模:地下2階、地上13階 | 構造:RC造 | 改裝設計:岸和郎(K.ASSOCIATES/Architects)





乃木坂の「分居」。バルコニーから入口方向を見る。斜線制限の形がそのまま室内に現れて、ダイナミックな空間が生み出された。絵の掛けてある正面の壁の裏側にバストイレのブースがある



【建築概要】名称:分居-N | 所在地:東京都港区 | 専有面積:36.76m<sup>2</sup> | 規模:地下1階、地上6階 | 構造:RC造 | 改装設計:桑山秀康(クワヤマデザイン事務所)



西側の壁一面は造り付けの大きな収納。上部の収納用に図書館のような移動式梯子まで用意されている



露出した設備の配管やダクトも白く塗られて空中に展示されたオブジェのよう。白い壁とグレーの家具の中で、赤い椅子と赤いバラの色が映える



檜の板で囲まれたベッドのコーナー。室内は、打ち放しコンクリート、木毛板、アルミの床板と堅く無機質な材料なので、この場所はゆりかごのように優しく感じられる



バルコニーの正面にライトアップされた東京タワーが見える。私はスカイツリーなんかより、こっちのほうが好きですね。ノスタルジックで、哀愁があって、歌謡曲が似合いそう…



食事をしたり、お酒を飲んだり、仕事をしたり、なんでもござれの大テーブル。移動可能な小抽斗(こひきだし)付きというのが嬉しい。この働き者のテーブルも桑山秀康さんのデザイン

切る壁がキリリとした表情で自立しており、この焦げ茶色の板壁がアクセントとなって、室内は「白の印象」と「韓式の印象」をいっそう強めているように思えました。そうそう、白色といえば天井はコンクリートスラブを直接白く塗装してありました。この部分は本来は天井内に隠れてしまうところですから、施工はいくぶん投げやりで、ベニヤ型枠の荒っぽいツギハギ模様がそのまま現れていました。といっても、それがとても魅力的な表情です。韓国の室内は壁といわず天井といわず、白い韓紙を貼り巡らしますが、私はその韓紙の継ぎ目を連想しながら、しばしこの美しい模様に見惚れていました。先ほど書いたとおり室内は板壁で長手方向に仕切られています。その板壁も天井までは届いていないので、感じとしては限りなくワンルームに近い印象です。そして板壁で仕切られた寝室コーナーにはベッドがふたつ、縦並びに置かれていました。ここは細長い廊下状のコーナーなので、どことなくヨーロッパの簡易寝台車のような雰囲気です。目の前は一面の海と空ですから、コートダジュールを疾走する寝台車の気分ってところでしょうか。

ところで、言い忘れましたが、この「分居」は、以前は建築家の岸和郎さんの部屋でした。改修デザインも木下庸子さんではなく、岸和郎さんと藤岡新さんによるもの。木下さんはこのマンションの環境とインテリアデザインが気に入って、岸さんからそっくりそのままの形で譲り受けたのです。

ここまで書いてきて、以前、木下さんがお酒の席で「私のルーツはたぶん韓国だと思う」と話していたことを、ふと、思い出しました。この室内に漂う香気が、木下さんの遠い遠い祖先の血を呼び醒ましたのかもしれないね。

熱海を後にして、次に向かったのは乃木坂です。こちらの「分居」も新築ではなく、築32年のマンションの一室でした。熱海と同様、ドアを開けると真っ直ぐ一直線に伸びるワンルームの空間。正面の開口部のむこうには、ライトアップされた東京タワーが、置物のように鎮座して我々の到着を待っていました。熱海と乃

木坂の正確な面積はわかりませんが、部屋の幅と奥行きはほぼ同じくらいでしょうか。ただし、天井の形状とその高さはまったく違います。熱海の天井はフラットでいくぶん低めですが、こちらは斜線制限の形がそのまま室内に現れて空間は左手から急勾配で上へ上へと昇っていき、部屋の真ん中近くでようやくフラット天井になります。天井高は最終的には3.5メートルほどになります。うなぎの寝床状の細長い平面形と、変形した五角形の部屋の断面形状が相まって、アツケラカンとした空間が生まれました。そしてそのアツケラカンとした室内はすっきり整然と片づいて、所帯じみたところがまったくありません。「洗練」とか「都会的」とかいう言葉で表現したら、少しはそのニュアンスが伝わるかもしれません。正面向かって左手奥の低い斜め天井のコーナーには、檜の板材で囲まれたぬくぬくと居心地の良さそうなベッドがすっぽりと嵌め込まれていました。木下さんの仕事は、日本国内にとどまらず海外にまで及んでいる上に大学教授も務めていますから相当な激務のはずです。このベッドは木下さんの休息と安眠のゆりかごになり、その活動の原動力になっているにちがいません。

さて、乃木坂の「分居」の特徴と見どころは空間だけではなく、仕上げ材の選択とその取り合わせにもあります。先ほどちょっと触れた檜の板材や、白く吹きつけ塗装したコンクリートの梁と天井の木毛板や、床に敷きつめた再生アルミの平板などの異なる素材が良い具合に共鳴し合って絶妙なハーモニーを醸し出しているのです。さらに家具の鮮やかな色が澄んだソプラノの歌声のようにハーモニーに彩りを添えています。

木下さんはこの改修設計をインテリアデザイナーの桑山秀康さんに依頼しています。基本設計の構想を伝え、あとは桑山さんにすっかりおまかせしたのだそうです。

「自邸を自分以外のデザイナーに依頼できるなんて、太っ腹だねえ」と私が言うと、木下さんは「一度だけ、クライアントっていうのになってみたかったのよ、その気持ち、中村さんもわかるでしょ?」と言って、悪戯っ子の目つきで微笑みました。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT[2001]、伊丹十三記念館[2007]など。

主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]など。